

1 1次変換と2次形式

n 個の実数の組 (x_1, x_2, \dots, x_n) を n 次元ベクトルといい、 x で表わされる。数 x_j ($j = 1, 2, \dots, n$) をベクトル x の成分という。成分がすべて0のベクトルを零ベクトルという。2つのベクトル x と y の内積は

$$(x, y) = x_1y_1 + x_2y_2 + \dots + x_ny_n = (y, x) \quad (1)$$

によって定義される¹。内積 (x, y) が0のとき x と y は直交するという。 x とそれ自身の内積 $Nx = (x, x) = x^2$ を x のノルムという。 x^2 の正の平方根をベクトル x の長さといい、 $|x| = \sqrt{x^2}$ で表わす。長さ1のベクトルを単位ベクトルという。 x を y に移す次の1次変換

$$y_j = \sum_{k=1}^n a_{jk}x_k \quad (j = 1, 2, \dots, n). \quad (2)$$

において、行列 $A = (a_{jk})$ を

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2n} \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ a_{n1} & a_{n2} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix}, \quad (3)$$

と定義すると、(2) は $y = Ax$ と表わすことができる。行列 $A = (a_{jk})$ と行列 $B = (b_{jk})$ の積 $AB = C = (c_{jk})$ を次式で定義する。

$$c_{jk} = \sum_{\ell=1}^n a_{j\ell}b_{\ell k} \quad (j, k = 1, \dots, n). \quad (4)$$

また、単位行列 E を次式で定義する。

$$E = \begin{pmatrix} 1 & 0 & \dots & 0 \\ 0 & 1 & \dots & 0 \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ 0 & 0 & \dots & 1 \end{pmatrix}. \quad (5)$$

次式で与えられるクロネッカーのデルタを導入すると、

$$\delta_{jk} = \begin{cases} 1 & (j = k) \\ 0 & (j \neq k) \end{cases} \quad (6)$$

$E = (\delta_{jk})$ である。なお、 $AE = EA = A$ が成り立つ。

行列の成分に複素数を許すものとすると、 $\bar{A} = (\bar{a}_{jk})$ を A に共役な行列という。ただし、 \bar{a} は a の複素共役である。さらに、 A の行と列を入れかえた行列 $A' = (a_{kj})$ を A の転置行列という。 $A^\dagger = \bar{A}'$ を A のエルミート共役行列という。

$$(AB)' = B'A' \quad (7)$$

が成立する。 $A = A'$ なる行列を対称行列という。1次変換(2)の逆変換は

$$x_j = \sum_{k=1}^n \check{a}_{jk}y_k \quad (j = 1, 2, \dots, n). \quad (8)$$

¹「数理論理学の方法」R. クーラン & D. ヒルベルト、第1章

である． \check{a}_{jk} を成分とする行列を A の逆行列といい， A^{-1} とかく．次式が成り立つ．

$$AA^{-1} = A^{-1}A = E.$$

a_{ik} ($1 \leq j, k \leq n$) の多項式

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = \sum_{(j_1, j_2, \dots, j_n)} \varepsilon \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ j_1 & j_2 & \cdots & j_n \end{pmatrix} a_{1j_1} a_{2j_2} \cdots a_{nj_n} = \mathbf{A} \quad (9)$$

を n 次の行列式といい \mathbf{A} 或いは $|A|$ で表わす．ここに，和は $(1, 2, \dots, n)$ のすべての順列 $n!$ 個について行われる． $\varepsilon(\dots)$ は各順列が偶置換の場合 1 を奇置換の場合には -1 である．例えば， $n = 3$ の場合，すべての順列は $(1, 2, 3), (1, 3, 2), (2, 1, 3), (2, 3, 1), (3, 1, 2), (3, 2, 1)$ であり，置換の回数は夫々 $0, 1, 1, 2, 2, 1$ であるから

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{vmatrix} = a_{11}a_{22}a_{33} - a_{11}a_{23}a_{32} - a_{12}a_{21}a_{33} + a_{12}a_{23}a_{31} + a_{13}a_{21}a_{32} - a_{13}a_{22}a_{31}$$

(9) において， j 行 k 列の要素をすべて取り去った行列式に $(-1)^{j+k}$ を乗じたものを行列式 \mathbf{A} の余因子といい， \mathbf{A}_{jk} と表わす．すなわち

$$\mathbf{A}_{jk} = (-1)^{j+k} \begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1,k-1} & a_{1,k+1} & \cdots & a_{1n} \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ a_{j-1,1} & \cdots & a_{j-1,k-1} & a_{j-1,k+1} & \cdots & a_{j-1,n} \\ a_{j+1,1} & \cdots & a_{j+1,k-1} & a_{j+1,k+1} & \cdots & a_{j+1,n} \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{n,k-1} & a_{n,k+1} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \quad (10)$$

上式を使うと行列式 \mathbf{A} は次のように 1 つランクを下げた行列式に展開することができる．

$$\mathbf{A} = a_{1k}\mathbf{A}_{1k} + a_{2k}\mathbf{A}_{2k} + \cdots + a_{nk}\mathbf{A}_{nk} \quad (\text{列での展開}) \quad (11)$$

$$\mathbf{A} = a_{j1}\mathbf{A}_{j1} + a_{j2}\mathbf{A}_{j2} + \cdots + a_{jn}\mathbf{A}_{jn} \quad (\text{行での展開}) \quad (12)$$

一般に，次式の表現を得る．

$$\sum_{\ell=1}^n a_{j\ell}\mathbf{A}_{k\ell} = \sum_{\ell=1}^n a_{\ell j}\mathbf{A}_{\ell k} = \delta_{jk}\mathbf{A}. \quad (13)$$

(13) において， $\mathbf{A}_{k\ell}/\mathbf{A}$ を要素とする行列は逆行列 A^{-1} であることがわかる．行列 A と B の積の行列式は AB の行列式に等しい．即ち

$$|AB| = |A||B| = \mathbf{A}\mathbf{B}. \quad (14)$$

双 1 次形式を次式で定義する．

$$A(u, x) = \sum_{j=1}^n \sum_{k=1}^n a_{jk} u_j x_k. \quad (15)$$

A^{-1} の双 1 次形式は次式で与えられる .

$$A^{-1}(u, x) = -\frac{\mathbf{A}(u, x)}{\mathbf{A}}. \quad (16)$$

ただし ,

$$\mathbf{A}(u, x) = \begin{vmatrix} 0 & u_1 & \dots & u_n \\ x_1 & a_{11} & \dots & a_{1n} \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ x_n & a_{n1} & \dots & a_{nn} \end{vmatrix} = -\sum_{j=1}^n \sum_{k=1}^n \mathbf{A}_{jk} x_j u_k. \quad (17)$$

(15) において , $u = x$ とした場合を 2 次形式という . 特に $A = A'$ の場合を扱えばよい . なぜなら , $a_{jk} \neq a_{kj}$ の場合 , $\frac{1}{2}(a_{jk} + a_{kj})$ を a_{jk} とおけばよい . この場合には ,

$$AA'(x, x) = \sum_{k=1}^n \left(\sum_{j=1}^2 a_{jk} x_j \right)^2 = \sum_{j=1}^n \left(\sum_{k=1}^2 a_{jk} x_k \right)^2 = A'A(x, x). \quad (18)$$

このように 2 乗の和で表わされるので正値 2 次形式という . 複素数の成分とする行列 A において $a_{jk} = \bar{a}_{kj}$ である場合の 2 次形式

$$H(x, \bar{x}) = \sum_{j=1}^n \sum_{k=1}^n a_{jk} x_j \bar{x}_k = \sum_{j=1}^n \sum_{k=1}^n a_{kj} \bar{x}_j x_k, \quad (19)$$

をエルミート形式という . AA^\dagger の 2 次形式に対して次式が成り立つ .

$$AA^\dagger(x, \bar{x}) = \sum_{k=1}^n \left| \sum_{j=1}^2 a_{jk} x_j \right|^2 = \sum_{j=1}^n \left| \sum_{k=1}^2 a_{jk} \bar{x}_k \right|^2 = A^\dagger A(x, \bar{x}). \quad (20)$$

双 1 次形式 (15) において , 変数 x, y にそれぞれ , 行列 C, B なる変換

$$x_j = \sum_k c_{jk} \zeta_k, \quad y_j = \sum_k b_{jk} \eta_k, \quad (21)$$

を行うと

$$A(x, y) = \sum_{\ell=1}^n \sum_{m=1}^n p_{\ell m} \zeta_\ell \eta_m, \quad \text{ただし} \quad p_{\ell m} = \sum_{j=1}^n \sum_{k=1}^n a_{jk} c_{j\ell} b_{km}.$$

すなわち ,

$$A(x, y) = C'AB(\zeta, \eta) \quad (22)$$

である . 2 次形式 $K(x, x)$ に対しては

$$K(x, x) = C'KC(\zeta, \zeta) \quad (23)$$

である . 上式において変換前後において

$$E(x, x) = E(\zeta, \zeta) \quad (24)$$

を満たす場合を直交変換という . この場合には (23) において $K = E$ とおいて $C'C = E$ であるから

$$C' = C^{-1} \quad (25)$$

が成り立つ．複素数まで拡張した 2 次形式 $H(x, \bar{x})$ においては，変換前後において

$$E(x, \bar{x}) = E(\zeta, \bar{\zeta}) \quad (26)$$

が成立する場合には次式を満たす．

$$CC^\dagger = C^\dagger C = E, \quad \text{あるいは,} \quad C^\dagger = C^{-1}. \quad (27)$$

このような変換をユニタリ変換という．

2 固有値問題

2 次形式

$$A(x, x) = \sum_{j=1}^n \sum_{k=1}^n a_{jk} x_j x_k, \quad (28)$$

に変換行列 T の直交変換

$$y_j = \sum_{k=1}^n t_{jk} x_k, \quad (j = 1, 2, \dots, n) \quad (29)$$

をし，次のような標準形に変形しよう．

$$A(x, x) = \sum_{j=1}^n \lambda_j y_j^2 = B(y, y), \quad (30)$$

上式の行列 B は次のような対角行列である．

$$B = \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & \dots & 0 \\ 0 & \lambda_2 & \dots & 0 \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ 0 & 0 & \dots & \lambda_n \end{pmatrix}. \quad (31)$$

なお，任意の行列 C について， $CB = BC$ が成り立つ．しかるに， x の多項式

$$f(x) = (x - \lambda_1)(x - \lambda_2) \dots (x - \lambda_n) = |xE - B| \quad (32)$$

であるから， λ_j は方程式 $|xE - B| = 0$ の x についての根である． $B = T^{-1}AT$ であるから

$$\begin{aligned} |xE - B| &= |xE - T^{-1}AT| = |T^{-1}||TxET^{-1} - A||T| = |xE - A|, \\ |xE - A| &= 0. \end{aligned} \quad (33)$$

したがって，(33) を x について解けば λ_j が得られる．この式を A の固有方程式といい，この方程式の根を固有値という．

変換行列 T は次の条件から得られる．

$$TT' = E \quad (34)$$

$$AT = TB. \quad (35)$$

(35) より， $x = \lambda_\ell$ に対して次の n 個の等式が成り立つ．

$$\sum_{j=1}^n a_{kj} t_{j\ell} = \lambda_\ell t_{k\ell}, \quad (k = 1, 2, \dots, n) \quad (36)$$

これらのうち独立なのは $n - 1$ 個である。(34) よりの式

$$\sum_{k=1}^n t_{kl}^2 = 1, \quad (37)$$

を加えると n 個の $t_{j\ell}$ ($j = 1, 2, \dots, n$) を求めることができる。

例えば,

$$A(x, x) = x_1^2 + x_2^2 + 2x_1x_3 + 2x_2x_3$$

の場合には

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 0 \end{pmatrix}$$

A を対称行列にするため $A(x, x) = x_1^2 + x_1x_3 + x_2^2 + x_2x_3 + x_3x_1 + x_3x_2$ のように変形した。固有方程式は

$$\begin{vmatrix} x-1 & 0 & -1 \\ 0 & x-1 & -1 \\ -1 & -1 & x \end{vmatrix} = x(x-1)(x-1) - (x-1) - (x-1) = (x-1)(x+1)(x-2) = 0,$$

したがって, $\lambda_1 = -1, \lambda_2 = 1, \lambda_3 = 2$ である。即ち, 標準形は

$$A(x, x) = B(y, y) = -y_1^2 + y_2^2 + 2y_3^2$$

である。(36) より, 固有値 $\lambda = -1$ に対して,

$$t_{11} + t_{31} = -t_{11}, \quad t_{21} + t_{31} = -t_{21}, \quad t_{11} + t_{21} = -t_{31}.$$

であるから, $t_{31} = -2t_{11}$, $t_{21} = t_{11}$ を得る。さらに (37) より $\{1^2 + 1^2 + (-2)^2\}t_{11} = 1$, したがって, $t_{11} = t_{21} = \frac{1}{\sqrt{6}}$, $t_{31} = -\frac{2}{\sqrt{6}}$ を得る。 $\lambda_2 = 1$, $\lambda_3 = 2$ に対しても同様な方法で $t_{12} = \frac{1}{\sqrt{2}}$, $t_{22} = -\frac{1}{\sqrt{2}}$, $t_{32} = 0$, $t_{13} = \frac{1}{\sqrt{3}}$, $t_{23} = \frac{1}{\sqrt{3}}$, $t_{33} = \frac{1}{\sqrt{3}}$ を得る。

ベクトル t_1, t_2, \dots, t_n を

$$t_\ell = (t_{1\ell}, t_{2\ell}, \dots, t_{n\ell}), \quad (\ell = 1, 2, \dots, n) \quad (38)$$

のように定義すると, (36) は

$$\sum_{j=1}^n a_{\ell j} t_j = \lambda_\ell t_\ell, \quad \text{或いは} \quad t_\ell A = \lambda_\ell t_\ell \quad (\ell = 1, 2, \dots, n). \quad (39)$$

上式のように表される t_j を A の固有値 λ_j に属する固有ベクトルという。